互作用モデル）を用いた。調査内容は母乳栄養確立に関する①背景的変数，②動機変数，③認知的評価変数，④情緒反応変数，⑤身体的要因，⑥外的要因である。

合併症がなく，産後正常に経過した産婦40名を対象に，分娩後・退院時・産褥1か月の3回，配票調査および面接調査を行い，母乳栄養確立に関連する要因を抽出した。

分析は SPSS 統計パッケージを使用して統計処理を行い，産褥1か月の母乳栄養確立状況により，対象を母乳群・非母乳群に分け，2群間の有意差検定を行った。

その結果，母乳栄養確立に影響する要因として①周囲の人々（特に実母や夫）の意見，②身体的要因（乳房型，乳頭型），③外的要因（児の吸啜状態，授乳の中断），④授乳に関する不安や迷い，⑤母乳哺育の希望，⑥母乳栄養の利点の認識，⑦母乳栄養確立のために保健専門職を利用しようとする態度などが抽出された。

以上から，①周囲の人々や保健専門職など産婦の支援組織を整えること，②身体的要因，外的要因を母乳栄養に適するように整えること，③授乳に関する不安や迷いを解消すること，④産婦が母乳栄養の利点を認識し，母乳栄養を志向するように働きかけることなどが，母乳栄養確立に向けての援助の視点として重要であることが示唆された。

## 5. 重症脳性麻痺患者における異常筋緊張の分析および姿勢保持装具の効果

小野　泉，長谷龍太郎（作業療法学科）

重症脳性麻痺 (CP) 患者の異常姿勢は，非対称性緊張性頸反射 (ATNR) および緊張性迷路反射 (TLR) の異常亢進に起因する。安静時においても生ずる異常筋緊張の影響を受け，関節の変形や拘縮をまねく場合がある。姿勢保持装具を装着して正常に近い姿勢を保持することで，ATNR・TLR の影響を軽減できた1例の CP 患者を対象に，異常筋緊張の分析および装具の有効性を検討した。

患者の臥位安静時と装具を装着した臥位安静時ならびに健常者の臥位安静時，それぞれ左右対称10カ所から表面筋電図を記録し，その積分値を筋緊張状態の指標として比較・検討した。

Ⅰ．装具未装着臥位安静時

①全記録部位において，患者の筋緊張は健常者に比べ亢進しており，特に右体幹伸筋群では6.71倍，左側股関節外転筋群では17.7倍であった。

②患者の安静時筋緊張は顕著な左右差があり，股関節外転筋群以外全ての筋群において，右側に，より高度な筋緊張亢進を認めた。

Ⅱ．装具装着臥位安静時

①装具未装着の場合に比べ，患者の両側体幹伸筋群，両側股関節外転筋群，右側頸部屈筋群において，筋緊張の低下がみられ，特に，Ⅰ．①の右側体幹伸筋群および左側股関節外転筋群では，健常者安静時の当該筋群に比べ0.92倍，1.31倍の筋緊張であり，著明な改善が認められた。

②Ⅰ．②でみられた筋緊張の左右差は，両側体幹屈筋群以外全ての筋群において減少した。

以上から，姿勢保持装具の使用が，患者の体幹伸筋群と股関節外転筋群の異常筋緊張を軽減し，かつ筋緊張の左右差を減少する上で有効であることが明らかになった。

## 6. 発達障害児に対する感覚統合療法の効果

木俣祐子，長谷龍太郎（作業療法学科）

感覚統合療法の特徴は，心理学・教育学の学習行動理論に生物学的発達理論を組込み，独自の感覚運動プログラムを作成していることにあり，粗大な運動を通して，学習の基礎である感覚の組織化を促進しようとするものである。3名の障害児を対象に感覚統合療法の効果を検討した。

1.　学習障害男児。治療開始時（6才11ケ月）の症状：発語障害，情動不安定，転導性，姿勢平衡反応未熟。E. E. G., C. T., 聴力検査上異常なし。動作性 I. Q., 98 (WPPSI)。感覚統合検